

群 教 セ	F09 - 01
	平 16.218 集

「適応指導教室」での学びを生かした 不登校対策支援の研究

－ 学校システムの転換を目指す不登校早期発見・早期対応プログラムの構築 －

長期研修員 小林 規朗
長期研修員 瀧川 豊宏
指導主事 井上 淑人

《研究の概要》

本研究では、適応指導教室での参加観察を行い、その学びを生かして不登校早期発見・早期対応プログラムを作成した。それとともに学校の中で情報を共有し、早期の課題解決を目指す風土へとシステムを転換することの重要性を提言するものである。特に、子どもを背景から理解するためのアセスメントや評価重視の円環的な支援、チームで行う支援、発達課題を考慮した支援等の有効性が明らかになってきた。

【キーワード：教育相談 不登校 適応指導教室 早期発見 アセスメント システム】

研究の問い

1 出発点

不登校の数は、平成14年度から減少傾向を見せ始めている。平成15年度も全国では約5,000人、群馬県でも56人の減少を見た。しかし、総数は全国で約12万人、群馬県では1877人（小学校317人、中学校1560人）にのぼる。小学校でおよそ1校に1人、中学校では1クラスに1人の割合で不登校が出現していることになり、いまだ憂慮すべき問題であることに変わりはない。

現場の教師は、不登校の子どもに対して、学校復帰させたいと日々懸命に立ち向かっている。だが、努力の割になかなか成果が上がらず、不登校の子どもにはどのような手だてが有効なのだろうか、どうすれば不登校を出さないことができるのだろうか、と思い悩んでいる教師も少なくないだろう。研究者自身もそんな問いをもつ教師の一人であった。

先行研究として、群馬県総合教育センターの『不登校問題課題解決支援資料』の中で、適応指導教室、学校「ほっとルーム」、子育て支援、不登校児合同体験学習の4つの支援から、「ふれあう」「つくる」「つなぐ」をテーマにした実践研究の成果として生成された不登校解決モデル等に触れることができた。また、この資料の中で、不登校問題解決の課題として、問題解決の学校風土をどうつくるか、今までの学校システムをどう転換していくか等が存在することも確認できた。

本研究の一環として、横浜市の適応指導教室「ハートフルスペース」「ハートフルルーム」を視察する機会が得られた。特に、「ハートフルルーム」からの学校復帰率が、約8割だということを知って驚かされた。不登校に対する横浜市の取組「不登校対策アクションプラン」が、成果を上げている。この時、適応指導教室に不登校対策へのキーワードが隠されているのではないか、という実感をもった。横浜市の視察では、このほか、働きかけることの大切さ、学校・家庭・適応指導教室・教育委員会等の連携による取組の重要性、「一人ひとりをクラスの主役に」をキャッチコピーにした予防策の重視などが印象に残った。

今年度、県内の適応指導教室をフィールドとする研究の機会を得ることができた。適応指導

教室をフィールドワークして、フィールドの現状や実践から学んだことを生かしながら、不登校対策の一助となるプログラムをまとめたいと考えた。

2 研究の問い

研究の問いとしては、上記のことを踏まえて、次のように設定した。

- なぜ、不登校問題は、解決しないのか。
- 不登校児を具体的にどのように支援していったらよいか。
- 学校、家庭、適応指導教室等の望ましい連携の在り方とはどのようなものか。
- 適応指導教室の実践の中で、学校現場に生かせる支援にはどのようなものがあるのか。
- 問題解決の風土とはどのようなものなのか。

3 フィールドに入る前のキーワード

研究を進めていく上でのキーワードは、以下の通りであった。

- 不登校児の的確な理解・アセスメント
- 不登校児に対する有効な支援
- 学校、家庭、適応指導教室の連携
- 不登校児に対するチーム支援の方法
- 相互コミュニケーション
- 不登校の早期発見
- 学校システムの転換
- 問題解決の学校風土
- スモールステッププログラム
- 適切な登校刺激

研究の手順

本研究の手順は、図1の通りである。

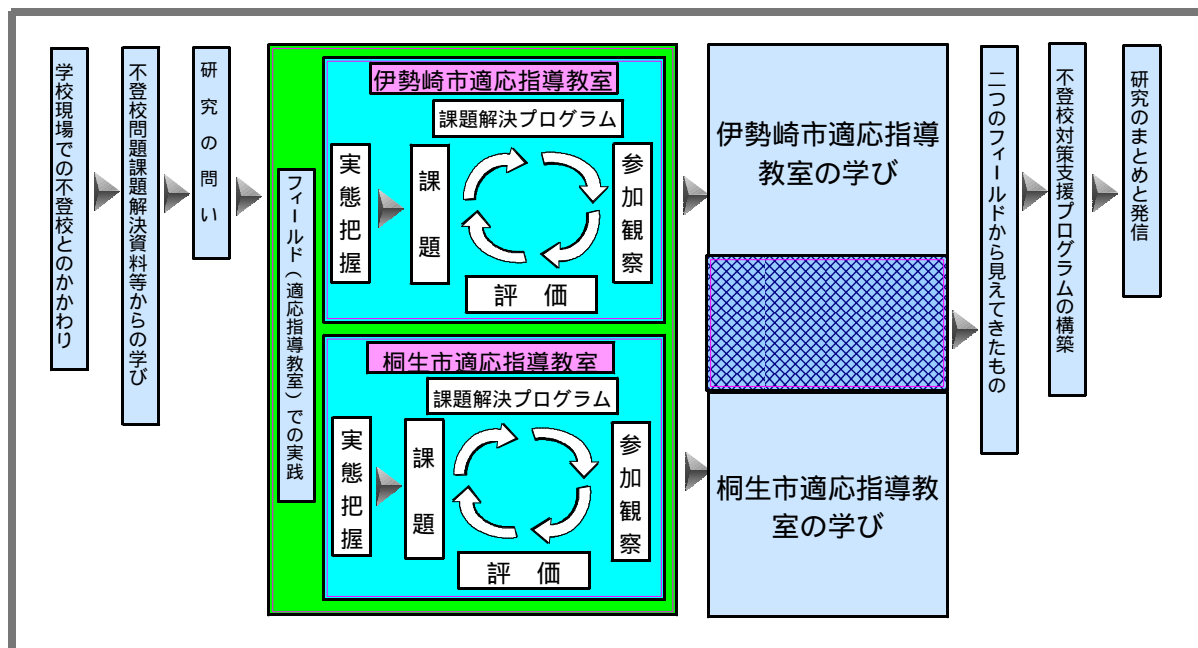


図1 研究の手順